

## 指導と評価の一体化に向けた取組

### —Small Talk の実践及び学習到達目標の活用—

常滑市立小鈴谷小学校 教諭 加藤 真治

#### 1 学校・児童の実態

本校の歴史は古く、明治21（1888）年開校の私学「鈴溪義塾」の流れをくむ学校として、現在に至っている。「鈴溪義塾」は、トヨタ中興の祖とされる石田退三や、敷島製パン創業者の盛田善平などの多くの著名人を輩出している。そして、鈴溪義塾の理念「志 学ぶ 情熱」と郷土に誇りをもち、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成を図ることを教育目標としている。

全校児童165人、全9学級の小規模校で、明るく活発で素直な児童が多い。移行期間における外国語活動の授業時数は、1・2年生で5時間、3・4年生で15時間、5・6年生で50時間である。担任が中心となって授業を進め、どの児童も英語に興味・関心をもって積極的に学習に取り組んでいる。

中部国際空港セントレアを臨む本校で、先人たちに続いて明るい夢と希望をもち、世界に羽ばたくために必要な英語を意欲的に学ぶ児童の育成を目指した実践を行うこととした。

#### 2 ねらい

令和2年度から小学校外国語科が導入されることとなり、高学年では「聞くこと」「話すこと」に加えて、「読むこと」「書くこと」の4技能を扱った言語活動が求められる。また現行の外国語活動の目標の「コミュニケーション能力の素地を養う」ことが、外国語科では、「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する」となり、外国語活動の「慣れ親しみ」から、「知識として理解し、技能として使える」ことを目標としている。そこで、本実践では、言語活動の一つである Small Talk の実践と学習到達目標の活用に焦点を当て、高学年の児童が意欲的に英語を学ぼうとする指導と評価の在り方を探る。

#### 3 実践

##### (1) 手だて

##### ア 復習の活動の中で Small Talk を設定

Small Talk とは、新学習指導用要領で示された「話すこと〔やり取り〕」の言語活動の一つとして、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりする帯活動である。5年生では指導者の話を聞くことを中心に、6年生では児童同士のペアで伝え合うことを中心に行うこととされている。復習の活動として、Small Talk を通して、既習事項や対話を続ける表現の定着を図ることで、英語を聞いたり話したりする意欲を高めることができると考えた。

##### イ 「CAN-DO リスト」の形での学年の学習到達目標を設定

中学校や高等学校では、「英語を用いて何ができるか」という観点から、学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定している。卒業時の学習到達目標を達成するための学年ごとの目標として、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を用いて「～することができる」という形で示されている。小学校でも、「聞くこと」「話すこと」について「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を

作成し、活用することで、児童が見通しをもって活動に取り組んだり、自分の定着を確認したりしながら、意欲的に英語の学習を進めることができると考えた。

ウ 学習到達目標の設定から評価活動までをイメージした単元構成の工夫

1時間ごとの目指す姿を明確にした単元計画を作成する。また、令和2年度からの外国語科では、「目標を達成しているかどうか」の達成度評価も必要となるため、パフォーマンス評価の実施を位置付ける。毎時間の目標や学習の流れが示された学習カード（自己評価シート）を使って、児童が授業の振り返りをするすることで、学習の流れや毎時間の目標を意識しながら、意欲的に英語学習を進めることができると考えた。

## (2) 指導の実際と考察

ア 復習の活動の中で Small Talk を設定

(ア) 5年生の実践（平成30年度）

5年生では、1学期の途中から Small Talk に取り組んだ。まず、教師が話す基本的な英語表現をよく聞いて、児童が即興で質問に答えることができるようにすることを目標とした。また、短時間で多くの児童とやり取りができるように、テンポよく進めることを心がけた。

12月の Small Talk では、前時までに学習した「できること（I can～）」をテーマに教師と児童でやり取りをした。Small Talk に取り組み始めた頃は、教師の質問に答えるまでに時間がかかったり、答え方に自信がなかったりする児童もいたが、帯活動として行うことで、児童は英語で答えることに慣れていった（資料1）。

(イ) 6年生の実践（令和元年度）

6年生では、4月から Small Talk に取り組み、教師が示したテーマについて、児童同士で会話を続けることを目標とした。最初は、教師が黒板に掲示した絵を参考にしながら、児童がペアで“Do you like～?”と質問する活動とした。自分で質問を考えることが苦手な児童も、黒板の絵を見ながら、友達に英語で質問することができ、児童同士でのやり取りに少しずつ慣れていった。

7月の Small Talk では、テーマを児童にとって身近な「食べ物」とし、児童は、ペアで1分間英語で会話をした。4月の頃は、“Do you like～?” “Yes, I do. / No, I don't.” だけのやり取りであったが、7月の実践では、“Yes, I do.” の後に、“I like～.” と言って、自分の好きなものを強調したり、“Me, too.” と言って、友達の答えに反応したりすることができるようになった（資料2）。また、「1分間」という目標時間を設定することで、少しでも英語での会話を続けようと、既習表現を思い出し、自分で考えながら質問をしたり、答えたり、反応を工夫したりする児童が増えた。さらに、児童から『どんな～が好きですか』と聞きたいという声上がるなど、自分が知りたいことや伝えたいことを、いろいろな表現を使って話そうとする児童の姿も見られた。

### 【資料1 教師と児童のやり取り】

テーマ「できること」

T: I can ski. What can you do?

S1: I can play the piano.

T: How about you?

S2: I can play basketball.

T: Can you play the recorder?

S3: Yes, I can.

T: Good. Can you play kendama?

S4: Yes, I can.

T: Oh, really? I want to check!

(S4 が実際に剣玉をやってみせる)

### 【資料2 児童同士のやり取り】

テーマ「食べ物」

S1: Hello.

S2: Hello.

S1: Do you like curry and rice?

S2: Yes, I do. I like curry and rice.

S1: Do you like cake?

S2: Yes, I do.

S1: Me, too.

S2: Do you like sandwich?

S1: Yes, I do. I like sandwich.

イ 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標の設定

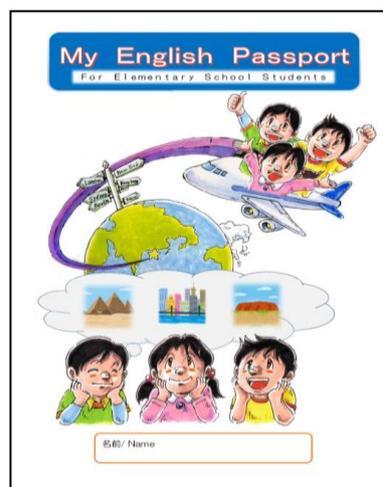
(ア) 5年生の実践(平成30年度)

学年修了時までには何ができるようになるのかという学習到達目標を、「CAN-DO リスト」の形で設定した。その際、愛知県教育委員会作成「グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方」(平成30年3月)に掲載されている自己評価シート「My English Passport」(資料3)を活用し、5年生の目標リストを作成した。「My English Passport」の「Listening, Reading, Speaking, Writing」の4技能のうち、「Listening」と「Speaking」を改良した目標リストを作成した(資料4)。

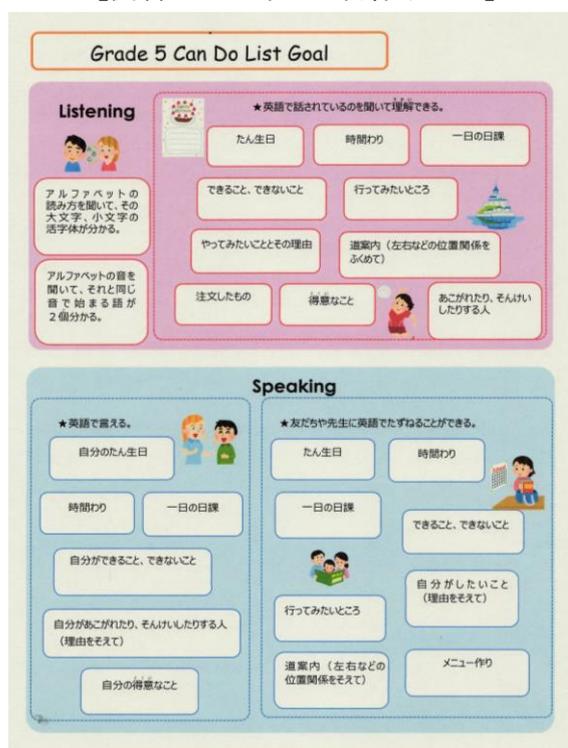
作成した目標リストは、5年生の2学期に児童に提示し、5年生のゴールまでに、英語を使ってできるようになることについて教師が話した。また、児童が目標リストの内容を意識しながら学習できるように、常に教室に掲示し、随時、児童と一緒に「この単位ではこれができるようになる」と目標を確認したり、単元の最後に何ができるようになったか、学びを振り返ったりした。

5年生の最後の外国語活動の授業では、5年生の学習を通してどんなことができるようになったかを目標リストを使って児童が振り返る場を設定した。目標リストの項目について、「◎、○、△」の三段階で児童は自己評価した。児童の三段階評価の結果を見ると、「一日の日課」と「道案内」の自己評価を「◎」とする児童が少なく、副詞を使って話すことや道順の英語を聞いて理解することが児童にとって難しかったということが分かった。また、「1年間でできるようになったこと」や「6年生でがんばりたいこと」の記述では、児童Aは、4年生の頃の自分と比べたり、「修学旅行では」と具体的な場面を想定してがんばりたいことを記述したりしていた(資料5)。また、児童Bは、学習したことをただ羅列するだけではなく、具体的な様子(「すぐ」「分かって」「すらすら」)や自分の気持ち(「うれしかった」「言いやすくて」)も記述していた。これは、目標リストがあることで活動内容を思い出し、そこから自分の学習の状況を具体的に振り返ることができたと考える。

【資料3 「My English Passport」】



【資料4 5年生の目標リスト】



【資料5 児童の振り返りの記述】

- ぼくは、4年生の頃は、ほとんど英語を話すことや聞くこと、言うことができなかった。でも、1年間でだいぶ英語が話せるようになり、英語がすきになった。6年生の修学旅行では外国人に話すことがあると聞いたので、いっぱい話したい。(児童A)
- 自分のたん生日がすぐ分かって、すらすら言えた。道案内もできて、右とか左とか分かって、完ぺきになった。自分の好きな教科や日課が言えたので、うれしかった。得意なことは言いやすくて、おぼえることができた。(児童B)

(イ) 6年生の実践（令和元年度）

6年生では4月の授業開きの際に、6年生の目標リストを児童に提示した（資料6）。さらに、児童が、自分の目標や将来の姿を目標カード（資料7）に記述する時間を設けたことで、「自分の将来の夢を英語で言えるようにしたい」など、一人一人が英語を使ってこんなことをできるようにしたいという具体的な思いをもって、6年生の外国語活動がスタートした。また、目標カードには、1年間の振り返りを記述する欄をつくり、4月に立てた目標の達成度を学年末に児童が確認できるようにした。目標リストは拡大印刷して、教室内の壁に掲示し、児童一人一人の目標カードは廊下に1年間掲示し、5年生時と同様に目標リストを使って、各単元の始めや終わりに学びの足跡を児童と一緒に確認した。

ウ 1時間ごとの目標設定と単元末パフォーマンステスト（話すこと〔発表〕）

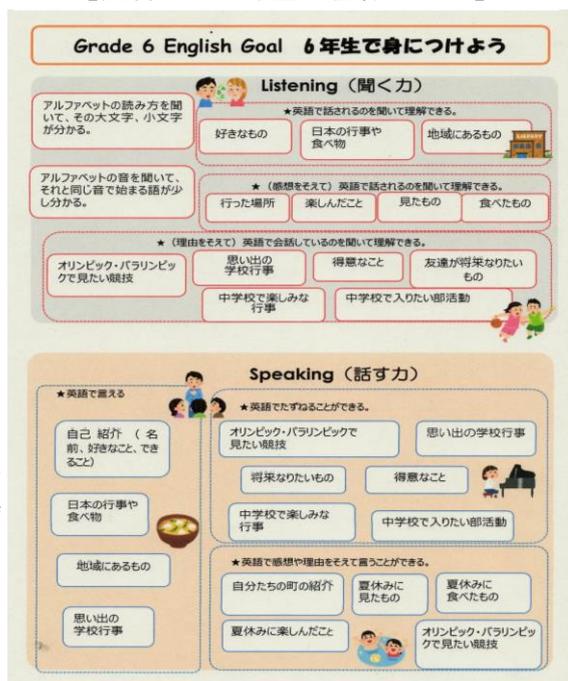
(ア) 5年生の実践（平成30年度）

各単元で1時間ごとの目指す姿を明確にするとともに、教科化に向けたパフォーマンス評価を位置付けた単元計画を作成した（資料8）。5年生のUnit5では、単元の最初に、教室に掲示してある目標リストを見ながら児童と一緒に単元の目標を確認するだけでなく、単元末に友達を紹介するスピーチによるパフォーマンステストを行うことを伝えた。

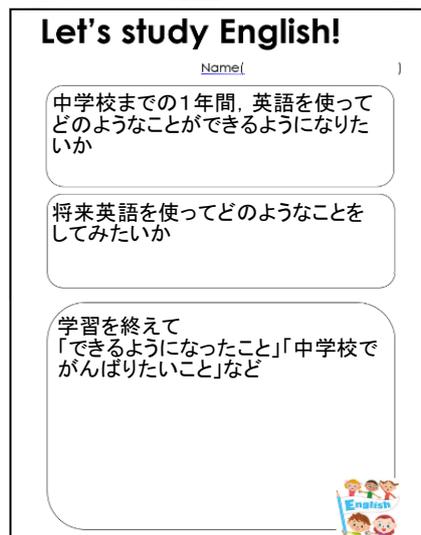
また、単元末のパフォーマンステストに向けて、児童が見通しをもって学習に取り組めるよう、単元の自己評価シートを作成した（資料9）。前単元までは、毎時間、A4半分の大きさの振り返りシートを配付・回収していたが、児童が単元全体の活動を見通して自分の学習を振り返ることができるように、1単元で1枚の自己評価シートとした。自己評価シートには毎時間の目標を記載し、児童が達成度（Excellent：よくできた・Good：できた・Bad：できなかった）を選択する欄と感想を記述する欄を設けた。また、児童の振り返りが次時の学びにつながるように、感想の欄には、「学んだこと」「できるようになったこと」「やってみたくらいこと」を毎時間、記述するように児童に指示した。

Unit5のパフォーマンステストは、児童は友達の「できること」や「できないこと」を学級全体の前で発表する形式とした。パフォーマンステストに向けて、児童は友達にインタビューをして分かったことを基に、友達を紹介するスピーチを考えた。

【資料6 6年生の目標リスト】



【資料7 児童の目標カード】



【資料8 5年生の単元計画】

We Can! 1 Unit5 She can run fast. He can jump high.

時	めあて	学習する表現等
1	いろいろなできることを言ってみよう	I can/can't ~.
2	友達にインタビューしよう	Can you ~ ? Yes, I can./ No, I can't.
3	先生にインタビューしてみよう	
4	身近な人を紹介する練習をしよう	He/She can ~.
5	友達のできることを紹介しよう	パフォーマンステスト

【資料9 自己評価シート】

その後、発表のポイントを児童と一緒に考えると、「ジェスチャーをつける」「大きな声で発表する」「前を向いて発表する」という意見が出た。これらの意見を基に、パフォーマンステストの評価の観点や基準として、『できること』『できないこと』を三つ以上、はっきりとした声で紹介する」ことができたなら、評価は「Great」になると児童に伝えた。パフォーマンステストの内容や評価について事前に児童に予告することで、どの児童も熱心に練習に取り組み、発表で

めあて	ふりかえり	感想(学んだこと・できるようになったこと・やってみたいこと)
いろいろなできることを言ってみよう	Excellent ( )	..... ..... .....
	Good ( )	
	Bad ( )	
友達にインタビューしよう	Excellent ( )	..... ..... .....
	Good ( )	
	Bad ( )	
先生にインタビューしてみよう	Excellent ( )	..... ..... .....
	Good ( )	
	Bad ( )	
身近な人を紹介する練習をしよう	Excellent ( )	..... ..... .....
	Good ( )	
	Bad ( )	
友達のできることを紹介しよう	Excellent ( )	..... ..... .....
	Good ( )	
	Bad ( )	

は、練習の成果を存分に発揮することができた。単元の最初に児童にパフォーマンステストについて伝えたとき、児童は英語でスピーチをすることに自信がない様子だった。しかし、よりよい発表になるよう学習を積み重ねることで、単元の最後には、自分たちが今まで朝の会や国語の学習で取り組んだ日本語でのスピーチと同じように、英語でもしっかりと発表ができ達成感を味わうことができた。振り返りの記述からも、「うまくできてよかった」と満足感を得た児童が多かったことが分かった。また、友達のよい発表を見て、「次は自分も同じようにやってみたい」という思いを振り返りに記述した児童もいた。

(イ) 6年生の実践(令和元年度)

6年生のUnit 3でも、1時間ごとの目指す姿を明確にし、パフォーマンス評価を位置付けた単元計画を立てた(資料10)。スピーチによる「Who am I? (私は誰でしょう) クイズ」を全員の前で発表するパフォーマンステストを、単元末で行うことを伝えた。

そして、パフォーマンステストに向けて、児童が見通しをもって学習に取り組めるよう、単元の自己評価シートを作成した。

6年生のパフォーマンステストは、児童が

「Who am I? (私は誰でしょう) クイズ」を出題することを通して、友達の紹介文を発表するという形式をとった。第3時は、「Who am I? (私は誰でしょう) クイズ」の内容を考えるために、「好きなもの」「ほしいもの」「できること」「持っているもの」「誕生日」など、友達にインタビューをした。その後、グループで教え合いながら、インタビューの答えを基に“like”“have”“want”などを使ったクイズを作った。その際、クイズの答えがすぐに分からないように、ヒントを出す順序を工夫するとよいことを児童に助言した。

第4時のパフォーマンステストでは、どの児童も事前に練習してきた内容を堂々と伝えることがで

【資料10 6年生の単元計画】

We Can! 2 Unit 3 She is famous. He is great.

時	めあて	学習する表現等
1	映像を見てだれのプロフィールかを考え、キャラクターの名前の書き方を知ろう	I play/want ~. 名前を英語で書く
2	英語の文の語順のきまりを知ろう	I eat/like/want/study ~.
3	英語の文の語順を意識して、友達を紹介する文を作ろう	インタビュークイズ
4	「Who am I?クイズ」をみんなの前で発表しよう	パフォーマンステスト

きた。また、クイズ形式の発表としたため、児童はクイズに答えようと興味をもって発表を聞くことができ、発表者の英語を聞いて、多くの反応があった。

毎時間の振り返りシートの記述には、「英語の語順のルールが少しずつ分かってきた」「I like や I can, birthday, I have, I want などの使い方を工夫した」「友達の好きなものを知ることができてよかった。みんなの前でクイズを発表するのが楽しみだ」とあり、本時の目標や単元末の発表を意識した記述が見られた。第4時のパフォーマンステスト後の感想では、「練習のときはなかなかうまく言えなかったけど、いっぱい練習して、本番ではうまく言えたのでよかった」「今回は緊張して大きな声で言うことはできなかったけれど、アイコンタクトは意識することができた。ジェスチャーはできなかったけれど、自分ではいい発表になったと思う」と練習の様子や、自分ができたこと、できなかったことを具体的に振り返っていた。毎時間、学習の振り返りを行い、記述を積み重ねてきたことが、単元末の発表の振り返りにも生かされたと考える。

## 4 成果と課題

### (1) Small Talk の取組

実践後のアンケートで、「Small Talk は英語学習に役に立ったか」と児童に質問したところ、27人中20人の児童が「そう思う」と回答した(資料11)。その理由として、「友達や先生と話すことで、本当に外国の方と会話したときに、実際に使えるのでよい」「何回も繰り返して言ったことで、どんどん上手に言えるようになった」などがあった。

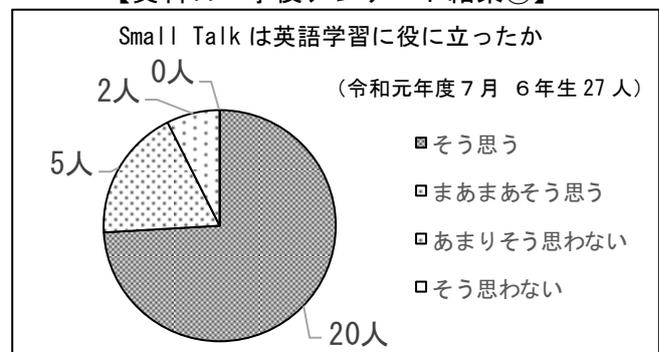
Small Talk に継続して取り組む中で、既習表現を使い英語での会話を続けるために、質問や応答、反応を工夫し、自分の気持ちや考えを進んで伝えようと意識できるようになった。このように、児童が、Small Talk を実際に英語を使う場として捉え、継続して活動することで、英語でのやり取りに慣れ、徐々に英語を話せるようになってきたことを実感していることが分かった。

### (2) 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定

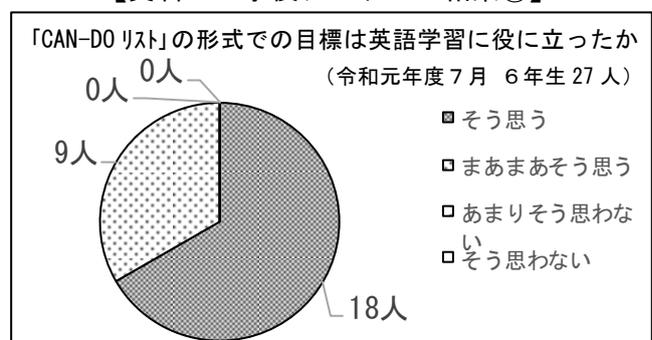
実践後のアンケートで、「『CAN-DO リスト』の形式での目標は英語学習に役に立ったか」と児童に質問したところ、27人中18人の児童が「そう思う」と回答した(資料12)。その理由として、「目標を見て、そこに到達しようと思えば、やる気が出る」「目標リストを見て、次にどんなことがやれるかが分かり、予習できた」などがあった。

学年終了時の目指す姿や単元の目標を具体的に示すことで、「これができるようになりたい」と児童の意欲を高めることができた。また、毎時間の目標を単元の最初に児童に提示することで、児童は学習の見通しをもつことができ、「がんばろう」という意欲を継続しながら活動に取り組むことができた。さらに、教師が目標リストに示した具体的な姿と児童の実際の様子を比べながら授業を振り返ることで、「この単元の表現はよく身に付いている」

【資料11 事後アンケート結果①】



【資料12 事後アンケート結果②】



「この単元では活動で十分に使えていなかったため、継続して復習していかなくてはならない」などと、自分の指導を見直し、授業改善につなげることができた。

### (3) 学習到達目標の設定から評価活動までをイメージした単元構成の工夫

外国語活動では、テストによる評価を児童は経験していない。そのため、パフォーマンス評価を位置付けた単元を計画したとき、テストとして発表を行うことが、児童にとって心理的負担にならないか心配であった。しかし、パフォーマンステストに向けた学習の見通しや評価の観点等を事前に具体的に示すことで、教師の予想以上に児童は熱心に練習や発表に取り組んでいた。こうした児童の姿から、新学習指導要領全面実施に向け、知識や技能の定着を見取るためのパフォーマンステストは、小学校でも可能であると考えた。

また、実践後のアンケートで「毎時間の目標が示された自己評価シートは英語学習に役に立ったか」と児童に質問したところ、27人中17人の児童が「そう思う」と回答した(資料13)。また、「パフォーマンステストは英語学習に役に立ったか」という質問には、27人中21人の児童が「そう思う」と回答した(資料13)。

その理由として、「学習の振り返りができる」「次に何をがんばればいいのか想像しやすい」「テストでより実用的な英語を身に付けることができる」「発表に自信がもてる」などがあつた。

教師が、評価までをイメージして単元の学習到達目標を設定し、その単元において目指す姿を見据えて、毎時間の目標を児童と共有しながら学習を積み上げていくことで、児童は安心して自信をもってパフォーマンステストに取り組むことができた。また、パフォーマンス評価だけでなく、自己評価シートの記述からも、児童の関心や意欲、達成感等を教師が把握することができ、児童の成長の見取りに有効であることが分かった。

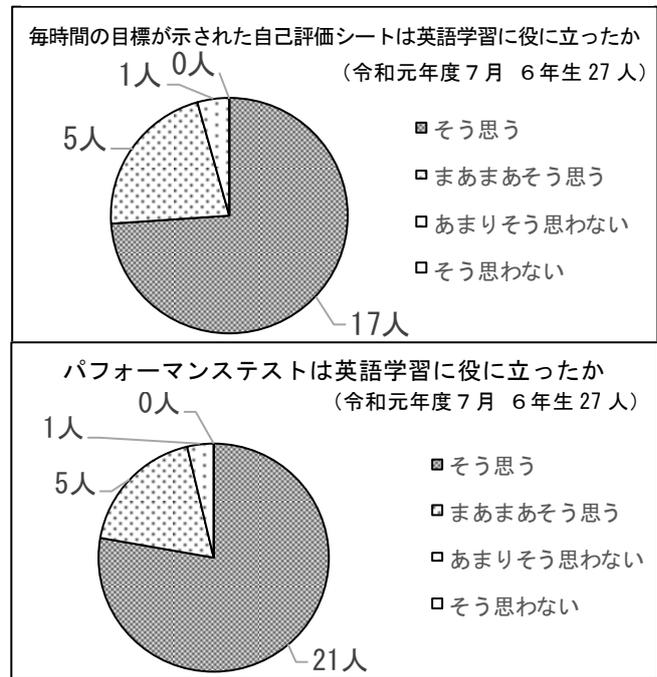
### (4) 今後の課題

本実践を終えて、「話すこと〔やり取り〕」の言語活動として、Small Talk の実践の大切さを改めて感じた。今後は、教師と児童がともに Small Talk の内容や対話が続ける表現の工夫をするなど、言語活動の充実を図っていきたい。そのために今後の課題として、次の2点がある。

- ・ 言語活動として計画的に Small Talk に取り組み、やり取りを通して、既習表現の定着を図る。
- ・ 「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」について、育成すべき力や評価方法を具体化する。

児童が英語に興味・関心をもてるよう、評価を生かした授業改善に取り組むとともに、外国語科として新たに加わる「読むこと」や「書くこと」を通して、児童が「英語を学ぶことが好き」と言えるような授業づくりを目指していきたい。そして、「英語でこんなことができるようになった」「英語を使って、こんなことをしてみたい」と目を輝かせながら、生き生きと英語を使おうとする児童が増えていくよう、今後も小学校外国語教育についての理解を深め、実践を積んでいきたい。

【資料13 事後アンケート結果③】



### 参考文献等

- 文部科学省『小学校学習指導要領』平成 29 年 3 月公示
- 文部科学省（2013）『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』
- 愛知県教育委員会（2018）『グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方 リーフレット』
- 「英語情報 2018 夏号」, 「英語情報 2018 秋号」 日本英語検定協会 2018